スタイル2

兼松伸行の かかり釣り（筏釣り・カセ釣り）入門

主に湾内の洋上に浮かべた筏やカセから、短竿とダンゴを使って足元周辺に集めたクロダイ・チヌを攻略するのが「かかり釣り」です。繊細な穂先の動きで魚と対話する神経戦。奥深くスリル満点の釣りです。

筏やカセから頭脳戦
ダンゴで楽しむ煙幕ゲーム

プロフィール
かねまつ・のぶゆき
1965年生まれ。大阪府大東市在住。中学生のころからかかり釣りを始め、数釣り、大物釣りどちらにも精通。年間釣果は1500尾を超える。JFTチヌ釣り王座優勝6回。京阪チヌ釣り研究会副会長兼釣り場開拓部長。

レクチャー1 かかり釣りとは？

筏とカセが舞台 ダンゴで竿下に寄せて釣る

かかり釣りは湾内の筏やカセから1・5m前後の短い竿とダンゴを使ってクロダイ・チヌを狙う釣りです。筏は、大きな発泡スチロールなどの浮力体と骨組みを組み合わせ、上一面に板を渡した構造物のことです。カセは、2～3人乗りの動力を持たない舟のことです。これらは渡船業者によって主に湾内の波静かなところにアンカーで掛けられ、そこに渡船で渡って釣りをすることになります。

「ダンゴを使う最大の理由は、においの成分や煙幕でクロダイ・チヌを効率よく足元近くに集めるためです。第二の理由は、付けエサを包んでエサ取りからガードし、確実にクロダイ・チヌが主に生息する底付近に付けエサを届けることにあります」

かかり釣り専用竿は、1・5m前後と短く、穂先はきわめて繊細に仕上げられています。クロダイ・チヌのアタリを読みとって掛け合わせ、鋭い引きを体全体で受け止めます。そのやり取りはスリル満点です。

かかり釣りにはダンゴが不可欠。クロダイ・チヌほか様々な魚たちを広範囲から集め活性を高める、付けエサを確実に底まで沈める、付けエサをエサ取りからガードするなど、いくつもの重要な役目をになっています。

筏は、海上に単独で掛けられていることもあれば、養殖イケスや真珠養殖棚の周りに掛けられていることもあります。

レクチャー ②

タックル&装備

竿は長短を使い分け オモリなしのゼロ釣法が主流

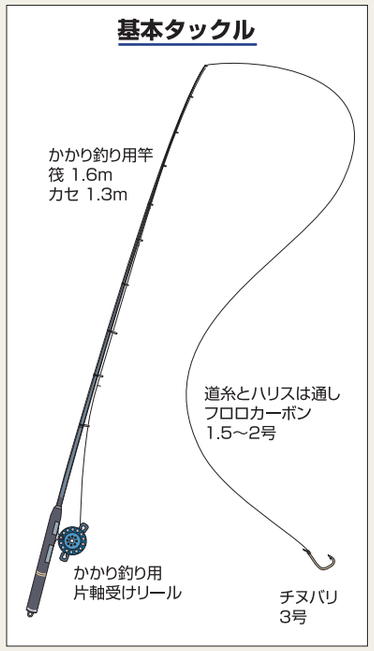
基本タックルは、かかり釣り用竿1・3～1・6mにかかり釣り用片軸受けリールを下向きにセット、道糸とハリスはフロロカーボン1・5～2号で道糸とハリスを分けずに「通し」（以後「ライン」と呼ぶ）で使います。ハリはチヌ用3号です。竿は、筏では自分の頭の位置から水面まで少し距離があるので1・6mを、カセでは逆に至近距離なので1・3mを使います。利き腕で竿を持ち、逆の手でリールを巻きます。

「オモリは基本的に打たないですね。オモリを打たない方が、エサの動きに違和感がなく、食いを誘発することができます。しかし、潮が速かったり風が強いときは、仕掛けを安定させるためにガン玉や中通しオモリを適宜選んでハリの近くにセットしていますね」

慣れないうちは、底をとる感覚をつかむためにオモリを打って釣るとよいでしょう。

なお、かかり釣りでは、万が一、落水したときに備えてラフトジャケットを着用します。

かさばらない膨張式で快適に着られる「ラフトジャケット型式承認品」。様々な安全基準をパスした国土交通省型式承認品の救命胴衣です。



レクチャー ③

ダンゴを作ろう

材料は「ベースエサ」と「ブレンドエサ」 違った成分を混ぜて効果大

筏やカセに渡って最初にする作業がダンゴ作りです。握りやすく、海底まで沈んですみやかに割れ、高い集魚力があるダンゴが理想です。兼松さんが初心者用にセレクトしてくれた材料が左上のようなものです。

ダンゴの材料は大きく「ベースエサ」と「ブレンドエサ」に分かれます。ベースエサはダンゴの主成分で、握りやすさや、沈みやすさ、濁りをだしてクロダイ・チヌにアピールするなどの役目があります。「赤だんごチヌ」と「伝統チヌ筏」がこれに当たります。

ブレンドエサは、クロダイ・チヌの臭覚や視覚にうったえて魚を集め捕食欲をかき立てる成分です。「チヌスパイス」「荒びきさなぎ徳用」「チヌにこれだ!!」などです。

これら違った成分を組み合わせることで、扱いやすく集魚効果の高いダンゴが生まれ、クロダイ・チヌが釣りやすくなります。

兼松さんのオススメパターン（約10時間を想定したときのダンゴ量）

【パターン解説】
ベースエサである「赤だんごチヌ」はある程度の集魚力を持ちます。「伝統チヌ筏」は濁りを発生させる役目があり、「チヌスパイス」「荒びきさなぎ徳用」「チヌにこれだ!!」は極めて高い集魚力があります。兼松さんは通常、さらにベースエサの「紀州マッハ攻め深場」、ブレンドエサの「ニュー活さなぎミンチ」をプラスして使っています。

【各材料の特徴】
❶赤だんごチヌ　酵母、オキアミ生エキスを配合したベースエサ。乾きにくいウエットタイプで、時間がたっても握りやすさが持続します。
❷チヌスパイス　ニンニクをはじめとして酵母、センキュウ、さなぎなどの複合スパイスを多量に配合した強力集魚タイプ。クロダイ・チヌの活性を高めます。
❸伝統チヌ筏　強烈な煙幕状の濁りを出してクロダイ・チヌを寄せるベースエサ。細粒の天然素材使用で、安定したダンゴが素早く作れます。
❹荒びきさなぎ徳用　最高級の粒さなぎを水中で特に目につくように荒びきに。ダンゴのバラケ性を高め、崩れ具合を調整できます。
❺チヌにこれだ!!　さなぎから抽出したエキスを濃縮し、クロダイ・チヌが好むとされる成分を生さなぎの10倍に高めています。

作り方の手順

オケでムラなく混ぜ合わせる

かかり釣り師はダンゴを混ぜる容器のことを「オケ」と呼びます。材料をオケに入れてムラなく混ぜ合わせるのが基本です。各材料は色が違うので混ぜムラのチェックがしやすくなっています。各材料を混ぜたあと、海水に「チヌにこれだ!!」を混ぜたものを入れ、さらにまんべんなく混ぜ合わせると完成です。1日10時間の釣りなら、5時間分を計算して、2回に分割して作ります。

❶ 「伝統チヌ筏」1袋、「赤だんごチヌ」1／2箱、「チヌスパイス」1／2袋、「荒びきさなぎ徳用」1／2袋をオケに入れます。

❷ 底から掘り起こしながら入念に混ぜ合わせます。最後に「伝統チヌ筏」1袋を追加して、もう一度よく混ぜます。これは、一度にすべてを入れてしまうと、量が多すぎて混ぜにくいためです。兼松さんは両手に厚手のゴム手袋をはめて作業をしています。

❸ 水くみバケツに海水3ℓを汲み「チヌにこれだ!!」を入れて混ぜ合わせます。

水くみバケツの水をオケに入れます。

❹ ムラができないように底からまんべんなく混ぜ合わせるとダンゴの完成です。

レクチャー ④

付けエサの使い分け

ローテーションが大切 コーンやさなぎはエサ取り対策

付けエサは、オキアミ、ボケ、コーン、練りエサ、さなぎ、丸えびなどを準備します。オキアミは軟らかい付けエサですが、加工品でエサ取りに取られにくくした「くわせオキアミスーパーハード」や、逆に食いが渋いときに食い込みやすくした「くわせオキアミ生タイプ」など、いろいろな種類があります。

「かかり釣りでは付けエサのローテーションが大切。釣り始めはエサ取りの様子を見るためにオキアミを使い、残ってくるようならオキアミやボケを使って釣り続け、すぐに付けエサが取られてしまうようなときにはコーンやさなぎなど、エサ取りに取られにくいものにローテーションします」

付けエサにするオキアミは、オケの片隅に置いておき「チヌにこれだ!!」をかけて使うと食いがよくなります。

【付けエサの特徴】
❶活さなぎ　厳選された生きたさなぎを瞬間冷凍し、うまみを損なわず、軟らかく食い込みがいいエサです。
❷くわせオキアミ生タイプ　食い込みのよさに重点を置いたタイプです。生の食感を保ち魚の好むアミノ酸をプラスしました。
❸くわせ丸えび　上質のエビを丸ごと特殊加工。平均55㎜の使いやすい大きさでエサ持ち抜群です。
❹くわせオキアミスーパーハード　食いのよさを高めながらエサ持ちのよさを追求。身に弾力があります。
❺くわせ練りエサチヌ　ニンニクとアミエビをたっぷり配合した練りエサです。エサ取り対策はもちろん、食いが渋いときにも効果的です。
❻くわせコーン　ハリにしっかりと残り、栄養価の高い胚芽部分と尖帽を丸ごと残した最適なくわせエサです。アミノ酸を添加し食い込み抜群です。

オキアミ
基本は、腹を外側に向けて尾バネから頭までクルッと刺します。

ボケ
尾バネの上側からハリ先を入れ、腹側に抜いてボケが直線状になるようにします。

コーン
ハリの大きさに合わせて、ハリ全体が隠れるように3～6粒を刺します。

ダンゴの握り方

付けエサと"アンコ"を均一の力で握る

ダンゴは付けエサといっしょにアミエビ、オキアミ、コーンを入れて両手で握ります。これを"アンコ"といいます。フグなどのエサ取りが多いときは割れにくいダンゴを、エサ取りが少ないときは割れやすいダンゴに握ります。均一の力で握り、割れやすさは握る回数で調整します。

❶ 片手にダンゴをすくい、真ん中に付けエサとアミエビを置きます。

❷ 同量のダンゴを上からかぶせます。

❸ 均一の力で4、5回握ります。

❹ テニスボール大に握って完成。

ポイント作り用ダンゴ

釣り始める前に、ポイント作りのためのダンゴを15個ほど投入します。割ったアケミ貝、オキアミ、活さなぎミンチなどを入れたダンゴを握り足元に入れるのです。中層で"自爆"しないように、しっかり握っておくことが大切です。

ダンゴは手で入れる人も多いのですが、兼松さんは、軟らかいダンゴでも自爆しないようにダンゴシャクを使って海中に入れます。

レクチャー 5

攻め方の基本

ラインは張らず緩めず付けエサを底から浮かせない

ポイント作り用のダンゴを投入したら仕掛けを作り、左のように水深分のラインに油性マジックでマーキングしておきます。このマークを基準に今後、釣りを展開していくことになります。

ハリに付けエサをセットし、ダンゴに包んでそっと投入。

「ダンゴが着底したら、ラインを張らず緩めずの状態で待ち、付けエサが出る瞬間を確認します。注意して穂先を見ていると、付けエサが抜けたときに穂先が戻りラインがフッと緩みます。このとき、付けエサが底から舞い上がらないようにすることが大切です」

ダンゴから付けエサが抜けたらエサ取りの有無を見ます。エサ取りがいれば、穂先に小さなアタリが出て付けエサがかすめ取られてしまいます。エサ取りがいなければ、穂先はピクリともしません。

エサ取りがいない場合は上への誘いをかけます。小さい誘いをかけ、次第に大きい誘いに変化させて視覚的にアピールします。エサ取りが多いときは、付けエサが目立たないように、ダンゴから付けエサが出たあと、ラインを送り込んで底にハワセていきます。

糸フケが出ていたとしても、ラインが水圧を受けているため、小さいアタリでも確実に出ます。

また、釣りをしている間、濁りの柱を作り続けてクロダイ・チヌに視覚的にアピールするため、片手で小さなダンゴをコンスタントに打つと効果的です。

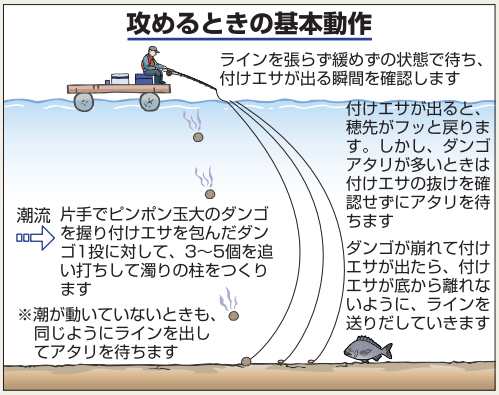
付けエサを包んだダンゴ1投に対して、3〜5個のピンポン玉大のダンゴを投入します。このダンゴは、濁りを出しながら沈んでクロダイ・チヌに視覚的にアピールします。

水深を測ってラインにマーキング

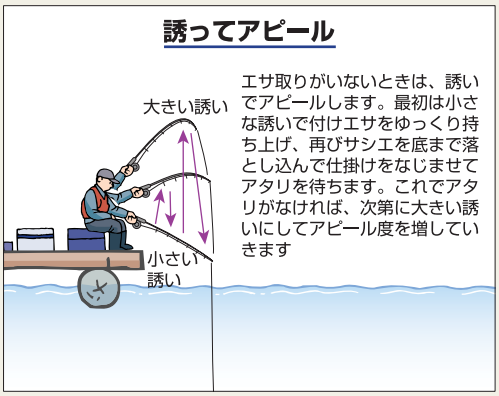
ゴム管付きオモリ3号を使って最初にきっちり水深を測っておきます。

オモリが着底したらリールの前のラインの30㎝ほどの間を油性マジックでマーキング。

攻めるときの基本動作



誘ってアピール



レクチャー 6

アタリの取り方

穂先が入って戻らないこのとき迷わず合わせる

アタリは基本的に穂先で取るようにします。

「穂先をグングンと押さえ込むようなアタリはまれで、穂先が波の揺れでクッと入り、そのまま戻ってこない重みのあるアタリが多いですね。このときに思い切ってアワセます」

釣り始めは、穂先が戻ってこないアタリをどんどんアワセていって、エサ取りばかりが釣れてくるようであれば、異なったアタリをアワセるようにしていきます。

エサ取りのアタリを見逃し、本命と思えるアタリをアワセることを、兼松さんは「好球必打」と表現しています。

波で筏が揺れますが、穂先がブレないように揺れに合わせて竿を上下させ、穂先を一定位置に保ちます。

穂先がちょっと入って戻ってこない。こんなアタリが意外に多いものです。

レクチャー 7

アワセ

極力大きく、素早くラインを絶対緩めない

穂先に何らかの変化を感じたら、迷わず思い切り合わせるようにします。

「アワセのスピードは極力大きく、素早くですね。合わせた位置から素早くリールを巻きます。ラインをたるませないためです。竿に充分テンションが乗ったままリールを巻き始めないと、ハリ外れが多くなります」

上への誘いをかけているときに、穂先に何かの重みが乗ってその位置で止まったときは「一発アワセ」を入れます。これはチヌが付けエサを食った瞬間に掛け合わせることを意味します。

アワセに迷いは禁物。チヌアタリだと視認したら、即座に竿を突き上げよう。

レクチャー 8

やり取りと取り込み

先手をとって魚を浮かせる竿とラインの角度は90度に

かかり釣りは、周りにロープなどが入っていることが多いため、魚に先手を取られないように、できるだけ早くクロダイ・チヌを浮き上がらせることが鉄則。早く浮かせるためには、竿先を高い位置に持ち上げて魚を浮かし、竿を戻しながらその分のラインを素早くリールに巻き取って魚との距離を詰めるテクニックを使います。これはポンピングと呼ばれています。

「竿とラインの角度は90度前後に保ってやり取りします。チヌが前に走れば竿を立てる、下へ走れば竿を寝かせる、そんな感じです。ロープなど障害物が多いところでは、竿の角度を保ったまま止めにかかります」

相手が突っ込んだときは、片手だけで竿を持ち、腕をいっぱいにのばして突っ込みをいなすようにします。腕を竿の一部のように使うのです。

竿が短いため、腕も竿の一部と見立てて魚の引きをいなします。

魚を浮かせたら、頭から素早くタモですくうようにします。

すくい終わったら、すぐにマキエ用のダンゴを打ちます。次のチヌを効率よく釣るためには、大切なことです。

竿でクロダイ・チヌをリフトアップし、すかさず浮かせた分のラインをリールに巻きとるポンピングは、かかり釣りでは不可欠のテクニックです。

クロダイ・チヌを浮かせたら素早くタモ入れします。水面で空気を吸わせる必要はありません。